

けが攻略シートを作って臨海学校に役立てよう

授業者 村上 朋美 安倍 堅介

1 本実践の教材について

本単元は、けがには人の行動と環境が関わることを理解するとともに、けがの悪化を防ぐための簡単な手当の知識や技能を身に付けること、また、けがを防止するために、危険の予測や回避の方法を考え、それらを表現することをねらいとしている。

本校の保健室には、けがで1日平均20人、年間延べ4000人以上の子どもが来室する。ほんの小さな切り傷から、捻挫・骨折の疑いのあるものなど、けがの種類は様々である。けがの原因を尋ねると「○○さんが△△したから」と自分の行動には目が向いていなかったり、「転んだ」という事実のみを捉えていたりする子どももいる。このように、けがに至るまでの自分の行動や周囲の環境については振り返ることができていないことが多いため、日常生活のありふれた行動や環境の中にけがや事故の要因があるにもかかわらず、それに気付かず繰り返されてしまうと考える。

また、子どもたちは、発育測定時の保健指導で、基本的なけがの手当について学んでおり、代表的なけがに対する手当について知識を得ている。しかし、保健室来室の様子をみてみると、鼻血の処置で圧迫止血ができるおらず口元で出血を受け止めるだけであったり、運動場で転倒して擦り傷を負っても傷口を洗わず「手当をしてください」と他人任せになっていたりと、知識と行動が結びついていない様子も見られる。これは、自己の健康課題について習得した知識を活用し、よりよい解決法を考えて実際の生活に役立てていく場面が少ないことが要因の一つとして挙げられる。

子どもたちには、けがの背景には、不注意や心・体の状態等の人の行動や周囲の環境等が関係していることを理解し、「自分の体は自分で守る」という意識をもって生活してほしいと願う。けがが起こりそうな状況を予測し、安全な行動を判断する能力や、実生活に生きる知識技能を身に付けさせることは、子どもが自分の命を守り安全な生活を送る上で大切なことであると考える。

本実践では、5年生の子どもたちが経験する行事である臨海学校を安全に過ごせるように、また万が一けがをした時に学校外の場所でも迅速に正しい対応ができるように、「けが攻略シート」を作成する取り組みを行う。臨海学校と本単元を関連させ、危険を予測し、自分の行動に注意を向けられるようにすることで、より切実感をもって学びをすすめられるようにする。子どもたちは、臨海学校の事前学習で、海や砂浜、利用する施設や場所の特徴を理解していく、どの場所でどのようなけがが起こりそうかを考えていく。その中で「クラゲに刺された傷は擦り傷や切り傷の手当が使えるのか」と今までの知識の活用の仕方に迷ったり、「限られたもので手当ができるのだろうか」と、不安になったりすることがあるだろう。そのような困りごとを解決する方法として、友達と意見を交流したり、養護教諭に助言を求めたりできるような環境づくりを行う。また、経験していないけがに対する応急手当の方法を考え、その手順を体験するためにロールプレイ活動を行うことで実践的に学び、知識と技能を身に付けていく。作成したシートは、子どもたちが持参するしおりに綴ることで学んだことを活用しやすくし、似たような事例が起きた時にそれらを見返すことで正しい対処法の実践につなげられるようにする。

2 単元の構想

今回の実践では、次の2点をポイントとして単元を構想する。

- 臨海学校で起こりそうなけがを予想し、それらができるだけ防ぎ安全に過ごすために、自分たちに必要な行動を考えることができるようとする。
- 実際の場面を想定しながら「けが攻略シート」を作成していくことで、けがの手当てをより実践的に理解できるようとする。

3 研究の視点に沿った具体的取り組み

(1) 健康に関する課題を自分事として捉えるための単元構成の工夫

単元の導入では自分が経験したけがの場面や学校内でのけがの場面から考えていき、次に通学路や地域でのけがへと、思考する場面を徐々に広げていくようとする。このような過程をたどりながら、学習した内容を定期的に想起させることで、どのようなけがを防止するにも危険の予測や的確な判断、安全な行動が必要となることを理解し、新しい場面にも活かすことができるようになると考える。子どもたちは臨海学校の事前学習を進めていく中で、活動の内容や場所の特徴等を理解していく、臨海学校を成功させたいという思いが少しずつ高まっていくだろう。その上で、臨海学校でどのようなけがが起こりそうか予想し、それらができるだけ防いで安全に過ごすために自分たちに必要な行動を考え「けが攻略シート」を作成していく。

(2) よりよい自分に近づくための思考を促す、かかわり合いの工夫

けがの手当については、子どもたちは、ある程度の知識はもっていることが予想される。そこで、臨海学校で起こりそうなけがについて「けが攻略シート」に記入し、その手当の方法や効果について実際の場面を想定して表現できるようとする。グループで実際のけがの場面を想定したロールプレイ活動をすることで、手当をするだけでなく、グループ同士での関わりを促し、自分たちの考えを見直したり、得られた意見を取り入れたりして、けが攻略シートをより充実したものに作り変えていく。子どもたが、正しい手当なのか分からずに困った時には、養護教諭が必要に応じて実習を支援し、傷口を水で洗い流すことや、炎症部分を冷却することの科学的根拠となる資料を提示し助言できるようにしておく。獲得した知識を活用し、よりよい解決法を提案しようとする姿は学級担任や養護教諭が積極的に価値づけ賞賛し、臨海学校に活かしていきたいという意欲につなげられるようにする。

(3) 健康を見つめ続けるための振り返りの工夫

子どもたちには、生涯を通じて自分の命や体を守り、安全な生活を送っていくための実践力を育成する必要があると考える。学習前後の考え方の変化をワークシートに書かせることで、考え方や意欲の変化が見えるようにし、さらなるけがの防止につなげていくための意欲が高まっていく様子に気付けるようにする。

作成したけが攻略シートは、学級に掲示後、子どもたちが持参するしおりに綴ることで、学んだことを活用しやすくし、実際に活動中に似たような事例が起きた時にそれらを見返して正しい対処法の実践につなげられるようにする。また、臨海学校後も、学級担任や養護教諭は、体育祭等の行事や日常の生活の中でもけがの原因や防止について考えさせる声かけを行い、状況に応じた適切なけがの手当を行おうとする意識を継続できるようにする。